



天気雨

猫柳ハヤ

照りつける陽は夏のそれだというのに、下草はひんやりとした湿気を帯びる。留まった湿気は地熱ですぐに温まるが、乾いた風に流されて体感温度を下げていく。暦が夏から秋の装いに移り変わろうとする、季節の境界が曖昧な時季。

しかしすべてが曖昧かと思えば、河原の緑に映える朱色が凄烈に目に飛び込んできた。剃刀花の別名通り、緑色を裂いて点在する彼岸花の群体(コロニー)は、薄い刃のような花弁の一枚一枚までをくっきりと存在させている。鋭利な刃先を何枚も向けられ、冷たい汗が僕の背中を伝った。背中の不快感を払拭する為、天(そら)に向けて大きく伸びをする。秋の深く奥行きのある蒼は、確かに此処での時間が経った事を告げていた。

長い夏期休暇の終わりを、僕はこの何も無い場所で迎えようとしている。博物館も図書館も無いが、清浄な空気だけは有るこの場所。休暇の初めのことを思えば、随分と楽に呼吸する事が出来た。そして一人、いつものように小さな小川沿いの、自然のままの河原を歩く。

「やあ——、」

唐突な声に驚いて、自分の胸を押さえる。動悸が収まるのを待って振り返ると、見た事も無い少年が立って居た。

目元が印象的な人懐こい笑みを浮かべた彼は、僕の緊張など気にもせず、胸に当てたままの手の甲に綺麗な指先で触れた。

「——、」

その冷たさに大きくひとつ、心臓が跳ねる。

「そんなに驚く事無いじゃあないか、」

「誰かが居るなんて思いもしなかった。」

「そうかい、」

形の良い薄い唇の両端が引き上がる。逆に目尻が下がるので厭らしくは無く、幼い子供のような笑い方だった。

「なかなか気付かないから、此方から声を掛けてしまった。」

「僕の事を知っているの、」

震える声を抑えて問う。小川の対岸から吹き抜ける冷えた風と、脈打つ鼓動が耳の奥で混ざって障った。

「ああ、知っているとも。僕はその為に此方側へ来たんだからね。」

言葉の意味を図りかねて口を嚙む。

僕の事を知っている、僕の知らない彼。僕の為に此処へ来た彼は一体何処から来たというのか。彼は何処に、僕は何処に立っているのか。

彼の後ろに見える川面の細波で、不意に閃く光に目が眩んだ。

「……、」

眩む視界で彼の姿が消えた後、さあ、と霧吹きで吹いたような水滴が頬に掛かる。陽を背にして見る霧雨に微かな虹が映った。

この日は少し肌寒く、紗のように掛かった雲に日差しが遮られている。河原の彼岸花は随分と濁った色を見せ始め、花の後から茂り出す深緑の葉が目立ってきた。河原の風景は鮮やかと謂うより濃い色合いに変わり、確実に秋を迎え入れようとしている。そんな深い色をした視線の先、小川の対岸で黒い翅が草の陰にいくつも並んでいた。

「……蜻蛉、」

僕の呟きが聞こえたのか、休んでいた蜻蛉の群れが風に乗って宙を流離う。漆黒の蜻蛉は、よく見る其れらの翅とは違い少し幅が広く、蝶のようにひらひらと舞っている。ぼつりぼつりと灯る燈籠花を背景に、列を為して飛ぶ様は葬列を思い起こさせた。

「極楽蜻蛉と謂うのだから、」

いつの間に傍に居たのか、この前の少年が同じ方向を見ながら云う。僕は驚く事も忘れて、目の前のしめやかな画に見入っていた。

「葬列の往く先が極楽なら、救われる。」

独りごちる僕の声を拾い上げ、彼は此方に向く事無く静かに告げる。

「彼等は先遣りだよ。」

「先遣り、」

僕の問い掛けに、漸く彼は僕の目を見た。少し上がり気味の目が冷ややかに細められる。

「——呼ばれるんだ。」

「何に、」

流れる水さえもが息を止めて静まり返る。無言と無音と彼の瞳が僕を射抜め、肺が凍ったように締め付けられた。

「ただの羽黒蜻蛉だ。水際を群れて飛ぶだけだよ。」

低く吐き出された彼の台詞が全てを元通りに動かし、向こう側を相変わらず、羽黒蜻蛉がゆったりと漂っていた。ぼんやりと眺

めていると日暮れの急な風が蜻蛉の列を乱し、僕の体温を奪っていく。

「じゃあ、また、」

耳元に吐息と声が届き、下がった体温と共に身体を震わせる。俯いて抱き締める自身の身体。ふと見ると靴の爪先に羽黒蜻蛉が一頭、留まっていた。

朝からさらさらと絹の糸のような細い雨が降っている。雲が薄い所為で天(そら)は明るく、糸引く雨は光を反射していた。河原は白く霧が掛かり、小川の位置すら判断できない。此岸と彼岸の境界を見失いそうだった。

「そろそろ、ゆこうか、」

煙って融けた景色の中で、彼の姿だけが鮮明に浮かび上がる。

「何所へ行くの、」

引き攣れた咽から辛うじて発せられた声は、僕の声のような気がしない。

「君はただ僕に、ゆく、と云ってくれさえすれば良い。」

紅い唇が笑みの容(かたち)を作り、とても優しい声音が耳に心地好い。同時に差し出された彼の手を、僕は何の躊躇いも無く握っていた。

「あ……、」

足許の羽黒蜻蛉の翅の金属質な光沢に、雨粒が受ける光が乱反射する。両手で顔を覆った時には既に遅く、虹彩への光の効果で意識が引き摺られた。

今居る場処は、此岸か彼岸か。

「ずっと待って居たんだ。」

生温い風が川面を走り、直ぐ傍を吹き抜けて彼岸花を揺らす。無数の朱色の花卉が僕を搦め捕り、足を掬われた。視界が反転を繰り返す、自分の立ち位置を見失う。激しい眩暈と息苦しさが僕を襲った。

ゆっくりと目蓋を開くと、天(そら)からは天気雨が続けている。失った手の感触を探していると、凧いだ水面を並んで渡る、幾つもの幽かな青い燐光の列。最後尾の彼が目を細め、にんまりと笑った。

「君を、だよ。」

…了